



中国の名門大学における外国人学生向け中国語教育

曹瑞林、張文青、李秀麗、王蕊、王振宇、呉青姫

アブストラクト

2009年度「APU中国語イマージョン・プログラムの充実・改善に関する研究」プロジェクトのため、筆者らは2010年3月6日から3月11日の日程で、中国の名門大学である華東師範大学、復旦大学及び浙江大学国際教育学院の三大学において外国人向け中国語教育を参観し、中国語担当教員との懇談を行った。

今回の調査で、上記三大学の中国語教育に対する明確な目標設定、専門性の高さや教員陣の熱意に感銘を受けるとともに学習者のモチベーションの高さにも驚きを覚えた。さらに、学習者同士の学び合いが非常に大切だと痛感した。今後の課題として、イマージョン・プログラムにおける学習内容の連携や到達目標設定などを提携校と事前に詳細にわたって設定しておくことの重要性またどの部分を改善すべきか、いくつか明確になったと考えている。

キーワード：学習者のモチベーション、明確な目標設定、自己表現意欲の向上、学習者同士の学びあい、刺激し合う相乗効果

1. APUでの中国語イマージョン・プログラムの実施

立命館アジア太平洋大学(以下、「APU」と呼ぶ)における中国語教育はAPUの言語教育の中で極めて重要な位置を占めている。近年多くのAPU卒業生が、対中国ビジネスや日中間の経済文化交流の場で活躍していることを考えれば、中国語教育はこのような人材育成を支える一つの重要な柱となっているといえる。

学生の中国語力を一層向上させるため、APUでは2006年度から東北財経大学(遼寧省大連市)、2007年度から浙江大学(浙江省杭州市)の協力を得て中国語イマージョン・プログラムを実施している。このプログラムは中国の大学に約5週間滞在し、合計67コマの集中学習で、4単位を修得するものである。

APUでは教員が今まで、教室でさまざまな工夫をしながら授業を展開しているが、学習者の中国語会話力や中国文化に対する理解はまだ満足できる水準には到達していない。このイマージョン・プログラムの特色は、徹底的な中国語教育を行い、学生が教室や教科書にとどまらず、現地ですの中国語を聞き覚え、中国での生活を通して中国や中国人の生活を観察し、中国文化に直接触れることによって、生きた中国語を学ぶ点にある。

筆者たちは2009年度「APU中国語イマージョン・プログラムの充実・改善に関する研究」プロジェクトを実施するため、東北財経大学におけるAPU中国語イマージョン・プログラムの研究報告書を作成するとともに、2010年3月6日から3月11日の日程で、中国教育部管轄下の重点大学である華東師範大学(上海市)、復旦大学(上海市)、浙江大学国際教育学院(杭州市)の三大学で外国人学生向けの中国語授業を見学、中国語教員との懇談、交流を行った。これらの取り組みに基づいて、APUの中国語イマージョン・プログラムの一層の充実に向け、いくつかの改善点を提起してみたい。

2.1 東北財経大学におけるAPU中国語イマージョン・プログラム

2.1.1 大連の概況と東北財経大学の地位

東北財経大学の位置する遼寧省大連市は人口600万を擁する、中国東北三省で最も開放的な国際都市である。快適な気候条件、美しい自然環境、そして豊かな観光資源に恵まれている。同大学は経済学、経営学を主とする教育研究型大学であり、現在、経済学、経営管理学、法学、文学、理学の5つの学部と経済学、経営学の大学院やMBA、MPA学院を有している。同大学には1000人余りの教員と2万人余りの在校生がいる。同大学は1994年から、教育の「高水準化、国際化」を目指し、現在14の国・地域の53大学との間で教育学術協定を締結している。また、学部生や大学院生を対象に、

10の専門コースが6カ国の9著名大学と共同で国際教育プログラムを運営している。

2.1.2 国際漢語文化学院の概要と外国人向け中国語教育の特徴

国際漢語文化学院は1988年の開設以来、日本、韓国、ロシア、アメリカ、カナダ、ドイツ、オーストラリア、シンガポールなど20カ国から、数千名の留学生を受け入れてきた。同学院は、留学生の中国語コミュニケーション能力の育成を目標としているが、この20年間、不断に教育改革を行い、特色ある教学システムを構築してきた。

その特徴としては以下のことがあげられる。

第1、学生の実態に合わせて、即応性のある教学方法の調整・改善を行っている。

第2、学生の出身国による特徴に対応して教授内容の重点を柔軟に取り扱っている。同学院によれば、一般に、英語圏の学生は聞き取り、会話能力に優れるが、漢字習得に難があり、読み、書きには弱い。他方、日本、韓国といった漢字文化圏の学生は読み、書きには優れているが、発音が弱点となっている、とのことである。したがって、同学院では、これらの特徴に合わせ、授業を展開している。

第3、学生に母国語の使用を禁じ、中国語のみの使用としている。これにより学生のリスニング能力をより早く上達させ、語感の発達を促進することが可能となっている。同学院では、日本、韓国、ロシア、タイの学生の割合が比較的に高いが、彼らは母国では母国語を媒介に中国語を学んできたものが多いという。同学院では、すべて直接法により中国語を教授し、当初はやや困難であるが、慣れさせていくことを通じて、中国語を母国語に訳す段階を省き、中国語で理解するように鍛えている。学生が内容を理解できないときは、別の中国語で繰り返し例をあげ、そのことにより語彙力も増強するという方法を採用している。

第4、中国語で表現することを重視している。同学院では、毎年西安、上海、青島等の地域を観光し、中国の文化、歴史、経済の発展を学び、その際には、中国語を使って現地の人々と意思疎通するように工夫すると同時に各地の風土、人情、地理風貌、各民族の生活習慣を理解するようにさせている。このほかにも各種スピーチコンテスト、中国歌謡の歌唱等、学生の余暇の時間を使って中国語に触れるチャンスを可能な限り作っている。

第5、同学院は長期、短期の言語研修生、本科生、修士と博士研究生を含む多様な教育システムを構築している。中国政府奨学金の留学生も受け入れている。長期言語研修生の教育は初級、中級、高級の三つに分けられる。初級は全くの初心者(初級B)とある程度中国語がわかる(初級A)に分けられる。また中国語レベル認定試験(HSK)は中国語を母国語としない人の中国語能力を検定するためにつくられた標準的な試験であるが、同学院では一学期の学習を終えて、初級Bの学生はHSK3級、初級AはHSK4級、中級BはHSK6級、中級Aは8級、上級クラスはHSK9~11級と到達点を設定している。

同学院には中国語専攻と国際貿易専攻の2つの本科があり、中国語に精通したうえで専門知識も備えた複合型人材の育成を目指している。同時に大学の31専攻科目、65修士課程、38博士課程も留学生を募集している。

第6、課程の設置は必修科目と選択科目の2つに分けられている。長期言語研修生は必修科目が毎週20コマである。初級クラスは聞き取り、会話、読み、書きの四技能の向上を目的としている。中級クラスでは自己の考えや感じたことなどを表現するトレーニングを行う。上級クラスではビジネス中国語、会話に関連した課程が増設され、ビジネス中国語教育、ビジネス中国語試験の実施及び研究は同学院の主要教育の特徴の一つである。2007年、同学院の教学の質と先進的な教育設備が上級教育機関に評価され、現在北京大学、復旦大学等20大学と共にビジネス中国語試験の一級試験会場になり、遼寧省において唯一単独でビジネス中国語試験会場の資格を得た大学となった。ビジネス中国語試験は母国語が非中国語の学生がビジネス活動を行う時に必要とされる国家級標準試験である。

長期言語研修生の教育レベル、課程設置、授業時間、教育目標等の内容は下記の表の通りである。

教育 レベル	教育類別	課程設置 (括弧内は毎週の授業コマ数)	教育目標

長期言語研修	上級	上級 B	精読 (6)、口語 (4)、聞き取り (4)、上級作文 (2)、 ビジネス中国語 (2)、中国文化 (2)	HSK 9-11 級
	中級	中級 A	精読 (8)、口語 (4)、聞き取り (4)、中級作文 (2)、	HSK 8 級
		中級 B	時事読解 (2)	HSK 6 級
	初級	初級 A	精読 (8)、口語 (6)、聞き取り (4)、中国語 読み書き (2)	HSK 4 級
初級 B		精読 (8)、口語 (6)、聞き取り (4)、中国語 読み書き (2)	HSK 3 級	

第7、同学院には優れた教員が多数在籍している。教授が4名、副教授が8名、講師は数名であり、80%以上の教員が修士以上の学位を持ち、大半の教員が「対外中国語教師資格証書」を取得している。北京大学、北京師範大学、吉林大学、北京言語大学等中国の名門大学で中国語文学或いは対外中国語を専攻したものがほとんどである。同学院は教員の国際交流を重視し、開設以来、合計11名の教員が海外の大学で中国語を教えた経験がある。

2.1.3 東北財経大学における APU イマージョン・プログラムの教育内容と成果

2009年8月9日から9月12日にかけて筆者たちは、APU 学生14名が参加する5週間イマージョン・プログラムを参観することができた。学生たちの中国語、とくに聴解能力、会話能力は、5週間の短期留学を経て大いに上達したといえる。学生の中国語レベルが上達した要因として以下のことがあげられる。

第1に、多様な科目の設置、適切な教材の使用により学習効果を高めたこと。この14名の学生とは、APU 国際経営学部とアジア太平洋学部の2年生と3年生であり、その構成は日本人学生11名、韓国人学生2名、オーストラリア人学生1名となっている。APUで中国語を履修し、中国語の一定の基礎を備えている。APU生は、同学院の短期留学プログラム初級と中級の2クラスに分けられ、授業を受けていた。

短期クラスは期間が短く、長期クラスのように授業を進めることができないため、教員は教材に必要な処理をしなければならない。短期で学生たちの中国語コミュニケーション能力を上げるという要求を満たすため、語法の内容を要約し、短くまとめ、語彙の内容をも取捨して教えていた。このような工夫により、短期間で課程を終了させつつ、学生たちの語彙を増やすことができた。これらの語彙はすべて日常生活で応用できるものである。

第2に、TAも導入して、徹底した中国語環境を作っていたこと。授業では、媒介言語を一切使わず中国語のみを使用していた。パワーポイントやジェスチャーが多用され、動的な授業が生まれ、さらにAPUの中国語教育と結合させるよう配慮されていた。最初、学生にとっては中国語のみの授業はかなり困難であるが、学生が理解できないとき、教員は違った角度から例をあげて丁寧に指導する。学生が母国語の使用をなるべく避け、中国語によるコミュニケーション能力を身につけるように教員が工夫している。授業後には中国人学生TAと会話をし、中国語学習と留学生活に関する課題について自由な形で交流させる。TAとの交流は中国語の聞き取り、会話能力を向上し、中国の若者の文化を知るためのよい機会である。

第3に、なるべく中国語を使う環境を作っていたこと。学生が買い物、レストランでの食事、タクシーの利用など中国語を使わなければならないように誘導し、中国語学習のモチベーションを高めるように工夫していた。

第4に、大連の経済、歴史や中国の文化を理解し、大連に愛着感をもつよう工夫していたこと。これは、イマージョン・プログラム参加学生にとって中国語学習に次いで重要な目的である。観光を通して、大連の著しい発展を感じる、特色あるレストランで食事を楽しみつつ、中国の食文化を体験する、スーパーマーケット、地下商店街で買い物をする等々の活動を通して、現代の中国を知り、また旅順見学等を通して大連及び近代中国の歴史を学ぶ。また京劇観賞、国有企業参観、経済技術開発区見学、中国経済・大連近代歴史に関する講義の聴講など、学生たちはさまざまな角度から中国と大連に対する認識を深めることができた。

同大学におけるイマージョン・プログラムは、同学院にとって重要なプロジェクトの一つである。APUの学生は5週間の集中学習を通じて、中国語の聞き取り、会話、読み、書きといった総合能力を一段と高め、中国文化に対する理解を深めるとともに、中国語学習への興味とモチベーションを高めることができたといえる。今後、このプログラムを安定化させるには、APU中国語イマージョン・プログラムに適合できる独自の中国語速成教材の開発が必要になると思われる。

3. 中国における上海、杭州と三大名門大学の訪問

2010年3月6日から11日までの日程で、中国教育部管轄下の重点大学である華東師範大学(上海市)、復旦大学(上海市)、浙江大学国際教育学院(杭州市)の三大学を訪問し、外国人向け中国語授業の参観、中国語教員との懇談、交流、中国語教育と関連する参考書、資料の収集を行った。その具体的な研究調査日程と活動内容は下記の通りである。

3.1 研究調査日程

- 3月6日 別府→14:10 福岡国際空港(MU518)→15:05 上海浦東国際空港
- 3月7日 中国語教育関係資料の収集、研究調査に関する打ち合わせ
- 3月8日 華東師範大学対外漢語学院(上海市)を訪問
- 3月9日 ①復旦大学国際文化交流学院(上海市)を訪問
②上海駅→杭州駅移動、浙江大学国際教育学院副院長予定者主催夕食懇談会
- 3月10日 浙江大学国際教育学院を訪問、杭州駅→上海駅
- 3月11日 18:10 上海浦東国際空港(MU531)→20:40 福岡国際空港

3.2 三大学が所在する上海市と杭州市の概要

今回訪問した三大学の所在する上海市と杭州市の概要について紹介する。

上海市は中国東部の長江デルタ地域に位置する。北は江蘇省、西は江蘇省と浙江省に隣接する。上海市は北京市、天津市、重慶市と並び、四つの直轄市の一つである。上海には18の区と1つの県がある。2007年末の常住人口は1888.46万人である。上海市は中国最大の商業、金融都市であり、2007年の一人あたりの平均GDPは10,529ドルである。外資系の企業数は34,218であり(2007年現在)、上位五位は香港、日本、アメリカ、台湾、韓国である。上海市は中国政府が指定する「国家歴史文化名城」の一つであり、市内には「全国重点文物保护单位」が多く存在する。その中でも特に黄浦江に面する外灘(The Bund)は旧租界時代から残されているヨーロッパ調の建築群がたち並ぶ地域として知られている。また、外灘の向かい側の「浦東新区」には開発新区や「東方明珠電視塔」などの新しい高層ビル群が聳えている。毎年、「国際映画祭」、「国際芸術祭」などの国際的なイベントが開催されている。2010年5月1日から10月31日にかけては「上海万博」が開催された。上海市には復旦大学、華東師範大学、上海交通大学、同済大学をはじめ61の大学がある。

杭州市は中国浙江省の省都であり、省の北部に位置する。杭州には8つの区と5つの県(県級市)がある。2007年末の常住人口は796.6万人である。杭州市は七大古都の一つであり、有名な観光都市でもある。大運河や西湖など歴史、自然遺産が多く存在しており、「地上の天国」と言われてきた。杭州市は上海市から180キロほど離れている。上海市などの周辺都市との間は鉄道や高速道路など交通網が非常に発達しており、優れた立地条件にある。また、長江デルタ地域で経済が最も発展している都市の一つであり、2007年の一人あたり平均GDPは8,699ドルである。杭州市には浙江大学をはじめ、36の大学がある。

3.3 中国における三大学の概要

華東師範大学(上海市)は1951年10月に開校した中国教育部直轄の重点大学である。「花園大学」と呼ばれる美しいキャンパスで知られている。教育、社会科学、人文科学、自然科学技術及び行政科学を含む学術研究型大学である。19の学部、47の学科、177の修士課程、120の博士課程が設けられている。教職員が4,500人余り、学部生が13,600人余り、修士課程学生と博士課程学生が9,800人余り在籍している。また1,100余人の専任教員がいる。経済、政治、文化が発展した上海にある同大学は日本、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、カナダなどの国・地域の100以上の

大学と交流関係を結んでいる。海外から大量の留学生が、正規課程や科目履修生として華東師範大学に留学している。同大学は、中国教育部の外国人向け中国語教育の拠点の1つに指定されている。

復旦大学は上海市に位置しており、1905年に創立された復旦公学を前身とする。中国で最も古い歴史を有する総合大学の1つである。2009年現在、復旦学院など30の学部からなり、26,362名の中国人学生、3,633名の留学生、2,426名の教員、252名の研究員が在籍している。

浙江大学は、1897年に創立され、中国で最も古い歴史を誇る名門大学の一つに数えられる。開学時は「求是書院」と称し、社会学や理学などの分野で国際的な知名度を高めることに尽力した。現在、同大学は、中国国家教育部直轄の総合重点大学であり、中国政府の重点プロジェクト実施大学としての地位を得ている。さらに、教育と研究、実力と実績は国内で一流とされており、中国の経済社会の発展のために、多くの優秀な人材と指導者を送り出してきた。かつてイギリスの著名学者ジョセフ・ニーダム氏から「東洋のケンブリッジ」と評された。

4. 華東師範大学における調査内容と成果

4.1 対外漢語学院の概要

華東師範大学対外漢語学院は2002年8月に設立され、外国人留学生のみならず、中国語教育を専攻する中国人学生も受け入れている。同学院は国家漢語弁公室の対外漢語教育基地であり、中国における最大のHSK試験会場でもある。現在、教職員数は合計76人、うち教授10人、副教授24人、講師25人が在籍している。43の国と地域から留学生が来ており、長期、短期と合わせて1,000人が在籍している。また、中国人学生は567人が在籍している。遠距離教育登録学生数は27,000人以上である。毎年、海外からの中国語講師370名近くが当学院で研修を受け、また、350名近くの短期語学留学生が同大学に留学している。近年、同学院は数多くの著書や教材を出版し、多くの研究プロジェクトが採択された。また、アメリカやイギリス、フランス、イタリア、日本、韓国、シンガポールなど各国の教育研究機構との学術的な交流活動も展開している。

博士課程（留学生・中国人学生対象）には中国文学、応用言語学、対外漢語教育学、文芸・文俗学などの研究分野がある。修士課程（留学生・中国人学生対象）には古典文学、現代文学、対外漢語教育学の三つのコースがある。

同学院は対外漢語教育学部、漢語言学部、漢語言文化教育センターの三つの学部から構成されている。対外漢語教育学部は中国人学生を対象にし、在籍者が約600人である。漢語言学部は留学生を対象にし、在籍者が約200人である。漢語言文化教育センターは留学生を対象にし、現在43の国と地域から短期・長期語学留学プログラムの在籍者が合わせて約1,000人が在籍している。ヨーロッパ、アメリカからの留学生が多いのが、同学院の特徴である。一方、日本・韓国からの留学生は全体の3分の1にすぎない。学生の多くは卒業後、同大学の各学部、または復旦大学、上海交通大学の学部に進学する。中国人学生と同じ専門授業が受けられる語学レベルに達していることから、漢語言文化教育センターの語学留学コースの質の高さを裏付けている。

漢語言文化教育センターでは1学期（4ヶ月）以上の語学留学を長期語学留学、4ヶ月以内の語学留学を短期語学留学としている。多くの留学生は1学期（4ヶ月）以上の長期語学留学プログラムに在籍している。長期語学留学プログラムは12レベルのクラスに分けられ、各クラスに20人前後の学生がいる。下記の表1は、各レベルのクラス編成、学習内容、教科書、到達度などをまとめたものである。

表1 各レベルのクラス編成及び学習内容

レベル	クラス	学習内容	テキスト	到達度
初級Ⅰ	1-1、1-2、 1-3	発音、声調、基本的な単語、文法、文章の構成を学ぶ。	『基本漢語Ⅰ』40 課程度	HSK 4級
初級Ⅱ	1-4、1-5、 1-6	中国と母国の文化の差異を学習し、実用中国語がどのように使用されているのかを	『基本漢語Ⅱ』の 40課程度	HSK 6級

		理解する。		
中級	2-1、2-2、 2-3、2-4	母国語で考えてから中国語に翻訳するのではなく、中国語を直接に理解し流暢に中国語が話せる。	『橋梁－中級水平的実験漢語』	HSK 8級
高級	3-1、3-2	書き言葉を理解する能力を高める。言語や文化の違いを超えて、広範囲のトピックについて話す。	『高級漢語教程』	HSK 10級、またそれ以上

上記の長期語学留学プログラムの概要は次の通りである。

期間は1学期もしくはそれ以上、週間コマ数は20コマ(1コマ45分)、授業開始時期は春学期(2月初旬)、秋学期(9月中旬)で、コースの特徴は1クラス20人程度、国別クラス分けはしない。クラス分けテストを実施し、文化活動と課外活動は毎学期、歴史的な名所への旅行で、無料となっている。カラオケ大会やスポーツ大会、インターシップなどがある。必修科目は精読、会話、リスニング、読解、作文など、選択科目は発音矯正、HSK対策講座、ビジネス中国語、書道、中国画、太極拳、二胡、上海の歴史、中国経済、中国文化等である。

4.2 調査内容

【クラス1】初級1-1Aクラス、担当教員：林曉勤先生、学生：13人

この授業では、複合母音の復習・練習を中心としていた。教員が発音し、学生が書き取り、教員が学生の間違いを訂正する。このクラスの特徴として、ボディランゲージ(身体言語や身振り言語)を活用し、媒介言語を使用しなかったことである。中国語+ボディランゲージで学生に指示を出し、授業が進められた。また教員がピンインの書き方を強調し丁寧に指導した。さらに学生の不安定な発音に対し、教員はほとんど指摘・矯正をしないし、学生は積極的に答え、間違いを恐れていなかった。

APUでは、学生が媒介言語に頼り過ぎる傾向がある。入門の段階からボディランゲージなどを活用し、媒介言語の使用を最小限に抑えるべきである。またAPUの学生、特に日本人学生の間間違いを恐れるあまり、授業活動に積極的に参加しない傾向が見られる。しかし、華東師範大学の授業を見て、「間違いを恐れない」授業づくりに向けて教員が工夫をしなければならぬことを痛感した。

【クラス2】初級1-2Aクラス、担当教員：金志軍先生、学生：4人

このクラスでは、欧米からの留学生を対象に中国語と英語を使って、漢字の構成、漢字の書き方およびその意味を説明していた。このクラスの特徴として、教員は学生に漢字の構成を紹介することがほとんどであり、学生が主導的に練習することがほとんど見られなかったことがあげられる。APUの中国語の授業では漢字の書き方などをまったく教えない。しかし、国際学生、日本人学生を問わず漢字をよく間違える。APUの入門クラスに漢字の書き方、部首の書き方についてのトレーニングを取り入れるべきである。

【クラス3】初級クラス=1-5クラス、担当教員：徐少芬先生、学生：15人

この授業では、中国語による大量の単語の意味の説明、リスニングの練習を行っていた。クラスの雰囲気は活発で、学習しやすい環境であった。

4.3 その特徴と今後の課題

APUの中国語教育に比べ、華東師範大学対外漢語学院の中国語教育は次の5つの特徴を持つ。第1に、媒介言語を使用しない。第2に、ゼロスタートのクラスから平常の会話スピードで授業を行う。第3に、単一の教授法ではなく多様な教授方法を採用している。第4に、全ての授業でマルチメディア教材システムの整備ができているが、「人対人」の伝統的な教学方法を重視している。

しかし、中国の大学における中国語教育現場とAPUのそれとの根本的な違いは、教材や教授法の違いではなく、学習者の学習意欲の強さの違いであると思われた。APU中国語イマージョン・プログラムに参加した学生のアンケートでは、

参加者全員が中国語に対する学習意欲が高まったとこたえている。特色のある APU の中国語教育を創出し、より高い教学効果を達成するため、APU 中国語学習者の学習意欲を強化することが非常に重要である。中国語イマージョン・プログラムや中国語検定への参加など、明確な中国語のスタディ・ビジョンとキャリア・ビジョンを学生に提示し、教職員一同で取り組まなければならない。

華東師範大学は多くの国々と連携し、多様なプロジェクトを展開してきた。APU とはまだ交流が行われていないが、今回の研究調査を通じて、今後、華東師範大学対外漢語学院と APU との中国語教育の面での協力関係の構築が期待される。

5. 復旦大学における調査内容と成果

5.1 国際文化交流学院の概要

復旦大学は 105 年の歴史をもっている。1974 年から本格的に留学生を受け入れたが、1980 年代以降留学生が急増、その需要に応じるため 1987 年に国家教育委員会の許可を経て「国際文化交流学院」を設立した。同学院は、復旦大学の留学生教育を担当する専門機構であり、新中国成立以降もっとも早く留学生を受け入れた対外漢語教育機構であると同時に、中国における最初の四つの留学生重点教育基地の一つでもある。

同学院は中国語教学と同時に中国語教師の育成にも力を入れている。「孔子学院設立プロジェクト」により、中国国内から 10 あまりの協力校を選抜したが、復旦大学もその中の一つであり、国際文化交流学院は 2005 年に北欧・ストックホルム大学孔子学院を皮切りにすでに海外の約 10 あまりの大学と共同して孔子学院の運営に力を入れている。同学院の対外中国語教育事情を知るため、以下、講師陣と留学生の状況等をまとめておく。

同学院には 54 人の専任教師と兼職講師が在職しているが、職位別構成では、教授 5 人、正高級講師 2 人、助教授 14 人、高級講師 7 人、講師 32 人となっている。年齢別では、40 歳以下の青年の教師が 61% (23 人) である。学歴別では、大学院卒が 37 人 68.5% (博士卒業者が 15 人、修士卒業者が 22 人) を占める。対外中国語教師の有資格者が 68.5% (37 人) を占めている。また学内言語学部の大学院生や退職した学内外の一部の教師を兼任教師として採用している。優秀な教育陣であり、対外中国語教材の約 40 種類を編纂している。現在同学院で使用している精読教材『拾級漢語』も同学院が編著したものであるが、初級から上級の聴解や会話などを合わせると 14 冊シリーズとなっている。

年間の留学生総延べ人数は 2000 人を上回るが、国費や短期集団研修生が多いのがその特徴である。これらの留学生は 50 カ国以上の異なる国々から集まってきている。表 1 で、同学院の留学生の種類を、表 2 では調査時 (2010 年 3 月) に開講されていたクラス数とそのレベル分け、1 週間の授業数とクラス別人数をまとめておく。

表 2 留学生の種類

1	本科生	漢言語[対外]専門	中国言語文化専攻 中英言語専攻
2	大学院生	修士 博士	
3	進修生(研修生)	一般研修生	長期進修生 短期進修生
		上級漢語進修生	
4	語学留学	長期留学(3ヶ月以上) 短期留学(2週間~12週間)	
5	特色クラス	中国文化研修生, 中国経済研修生	
6		研究学者	

5.2 調査の内容

同学院の授業参観に当たっては、C レベルの二クラスの精読 (文法の授業のことを指す) 科目を参観した。

5.2.1 クラス名 : C-M クラス 聴講時のクラス人数 : 13 人 (アジア系 : 欧米 = 1 : 3)

授業の方法を紹介すると、約7分間を利用して学習者に復習をさせ、前回に学んだ内容を一齐に暗唱させ、その内容に対して中国語で質問し、理解度を確認した。新しい内容に進んでからは、教員の方から段落ごとに学習者を指名朗読させてから、教員が必要な文型と単語を解釈する形をとっていた。

教員の学習者に対する指導工夫や配慮に関して述べておくと、授業中M教員は「教員主導+学生参加」形式をとっており、媒介言語を一切使わず全て中国語で授業を実行していたため、学習者にはよいヒヤリングの練習になるはずである。教師が中国語で説明をすると、学生達は必死に講義の重点をメモ書きしながら授業に専念したため、デイクテーションが鍛えられそうな授業スタイルでもあった。また文型の説明の部分では、学習者が経験した内容や理解しやすい内容への配慮がされており、同じ文型に対して多くの例文を取り上げて学習者に理解させようとしている工夫が見られただけでなく、内容の理解を数度確認しながら次々に進めていった。

学習者の学習態度をみると、私達とは初対面であったにも関わらず、ある韓国人の学生は何の躊躇もなく中国語で声をかけてくれたことから、学習者が心理的バリアーを感じずに楽しく授業に取り組んでいることが伝わってきた。また学習者は分からない点に関して積極的に質問をしていた。ある欧米系の学生は、分からない単語を聞くために立ち上がって身振り手振りを見せながら教員に自分の意図を伝えようと努力していた。また受講生は授業内容にほぼついていているように見えたが、それは予習を済ませて参加したからであり、そのような予習と復習の習慣が授業の理解を助長していたと思われる。

5.2.2 クラス名：C-Sクラス クラス人数：23人（アジア系：欧米系=1:3）

授業方法は次の通りである。本文の会話練習をするのに学習者同士がペアを組んで役割を分担して練習できるように十分な時間を与え、その間教員が各デスクを回りながら質問を受け付けた。また最終的に学生から出された質問をみんなと一緒に解いて行きながら文型練習をさせる形式であった。

教員は学習者同士の自主性を意識した授業方式をとっていた。ペアでの会話練習を通じて本文を理解させると同時に学習者が自分で問題を見つけ、質問ができるように誘導していった。また文型練習の際に、今回は分かりやすい一連の行為の「連鎖的な動き」からであったので、理解への配慮の工夫が見られた。例えば、「把」の構文を説明するのに「服を洗濯機に入れる」という内容から「洗剤を洗濯機に入れる」、「服を綺麗に洗う」、「ベランダに干す」など芋蔓式に例文を次々と挙げていった。

学習者の学習態度は、素直で積極的だったといえる。教員の中国語による質問の投げかけに対しても進んで発言し、例文を作っていた。理解できない部分は即時に質問をし、少しの緊張感と高い集中力で、提示された内容をその都度、理解しようと努力していた。

同学院における留学生の募集は、年間長期留学生在が約1400人、短期留学生在が約600人であり、短期留学生は季節によって人数に変動があるものの、夏は冬の倍になるとのことである。語学学習者は、本科生、長期生、短期生、専門科目研修生などのパターンがメインとなっている。

また長期の初級クラスは全部20人前後の編成で、初級と中級者には週20~22コマの授業が行われている。上級クラスは週14コマの授業であるが、中国語はしゃべれるが漢字をかけない華人向けの「漢字読み書き速成クラス」は週9コマの授業となっている。これらのクラス以外にも専門性を重視した「特色クラス」があり、集団研修生を受け入れるケースが多く、我々が調査した時点では日本のある企業からの依頼による中級者向け「日中商務漢語クラス」を開講していた。それ以外にも「中国経済クラス」、「漢語言高級文化研修クラス」が開講されていた。

教材使用に関しては、初級から上級へ一貫性がある教材を使用している。初級から上級への精読・読解・聴解・会話の教材は、主に同学院の呉中偉副院長等関係者によって編著された『拾級漢語』1級~7級と北京語言大学の『発展漢語・口語』、『発展漢語・聴解』初級~上級の上・下冊、『発展漢語・写作』中級~上級の上・下冊を使用していた。

同学院にはマルチメディアの施設が整えられているにもかかわらず、学習者のコミュニケーション能力を高めるために、人間(教員)による教育を中心にしているとのことであった。

5.2.3 その特徴と今後の課題

この二クラスの授業参観と全体を通じて明確になったのは、同学院の中国語教育の指導方法が「直接法」であり、授業中は90%以上中国語を使用し、媒介言語の使用頻度が非常に低いという点である。直接法は学習者のヒヤリング力を鍛えるという点でも参考になった。もう一つの点は、言語の伝達機能だけを重視する講義ではなく、同時に文法体系もしっかりと教えていたことである。初級から上級者向けの教科書が一貫性のあるシリーズ教材となっているため、学習者にとっては馴染みやすくなっている。これらの教材は少しの英語解釈がついている以外は、ほぼ中国語で解釈されており、色付のイラストが挿入されているため、視覚を通じて理解力を高めることができる。また文法や練習問題が綿密に組まれており、独学役に役立つだけでなくHSKへの対応にも適した内容となっている。

APUの初級中国語教育では文法翻訳法や日本語を媒介言語とした教学形式が一般的である。APUには、そもそも中国語環境がなく、中国語に接する機会が少ないため、授業での言語環境作りは最も重要な点となる。APUにおいてもこのような直接法の授業方式を積極的に取り入れ、一定レベルに達した中国語学習者に適用すべきだと考える。

また、学習者のコミュニケーション能力を上昇させるために、人による授業をメインにすることが重要である。コミュニケーション力の向上に向けて、現在APUでもTAの補助授業を取り入れ、積極的に取り組んでいる。今後、発信型の授業に変えて行こうと試みている。しかし学生の認知能力を高めるためにはマルチメディアによる授業がより効果的であることも否定できないため、学習者のニーズに合わせた教学法を選び、混合型授業にしていく必要がある。

さらに、復旦大学で使用されている教材は初級学習者から上級学習者まで一貫性のある教材であるため、内容に繋がりがあると同時に初級から上級までの学習段階で学習した内容を繰り返し復習しながらステップアップできるように工夫されている。また学習者は内容の混乱もなく、自分のレベルアップにより達成感を感じ、遣り甲斐を感じると考えられる。

授業参観中、学習者は積極的に授業に取り組んだが、唯一日本人学生の発言が少なかったことが目立った。日本人学習者は、他の国の学習者よりも心理的バリアーが高いように考えるが、今後APU中国語教育では学習者の自主性を強調しつつ、心理的バリアーをなくす方向に導くのも教員の課題であろう。

6. 浙江大学における調査内容と成果

6.1 国際教育学院の概要

浙江大学国際教育学院は、世界各国の留学生への中国語や中国文化、経済事情、ビジネス会話などの教育を行う部門である。同学院は、同大学の他の学院と並行し、独立した教育部門であり、現在、専任教員25人、同大学の他学部からの30数名の非常勤講師から構成されている。中国語や中国文化などの科目を設置し、欧米やアジア、アフリカ、オセアニアなどの70余りの国々からの留学生を受け入れている。彼らは、学院内で中国語と中国文化を学び、一定のレベルに到達すれば、同じ分野での学士学位を取得するコースに進学することが可能である。同学院は各国の留学生からは高い評価と信頼を得ており、中国語教育機関として国内外で大きな実績を収めている。

同学院は海外大学との教育連携やイマージョン・プログラムにも積極的に取り込んできた。2004年5月25日に、APUと学術・教育協定を結び、2007年からAPUイマージョン・プログラムを実施している。同年8月に第一期APU生を迎え入れ、夏休みを利用した5週間余りの短期語学学習を行い、大きな成果を上げた。

同学院は多分野、多学科にわたる開講科目を設置し、留学生に中国風俗や慣習、哲学、宗教、美学、政治、法律、経済学、マーケティング、経営学、貿易実務など幅広い分野を学ばせている。さらに、中上級レベルでは、聴解、会話などの基礎科目以外に、新聞と雑誌講読、テーマ討論、実用作文、HSK対策（漢語水平考試 Hanyu Shuiping Kaoshi の頭文字）も開講している。また、多様な選択科目が用意されている。

以上の科目設定から、留学生が中国語学習だけではなく、多分野、多学科の専門知識を身に付けることができるよう設計されている。また言語学習を通して中国文化を学び、将来の仕事や長い人生で有益な知識を習得させるということまでを教育の視野に入れているということが窺えた。

同学院の学習レベル設定は基本的に初級、中級、上級の三段階であるが、さらに綿密な指導を施すため、試験や面接を通して、実際には非常に細かいレベル（七つのレベル、Ⅰ→1.5→Ⅱ→2.5→Ⅲのように）を設定している。留学生は

過剰な負担やプレッシャーを感じずに、ほぼ同じ語学レベルのクラスメートと一緒に勉強し、相互に学び合い、競い合い、発言し易くなるように工夫してある。

同学院におけるAPUイマージョン・プログラム参加学生は、学院の初級Ⅱのクラスを受講していたが、現地在住の他の学生のレベルに追いつくことが困難である状況がしばしば見受けられた。APUでの学習時間は同学院の約半分しかなく、APUでの学習内容と現地での応用レベルには大差が生じている。APU生は懸命に勉強していたが、5週間という短期間で、顕著な上達を実現させることは困難であると推察された。今後、APUで使用する教材と現地の教材との連携を考えなければならない。また事前学習や帰国後の補習が必要だと思う。

6.2 授業参観及び教学調査の内容

6.2.1 担当教員：庄華萍先生、精読・文法授業、学生数：20数名（世界各国からの留学生）

このクラスでは、教員は単語や文法を説明する際に、解り易い文法構造をまず黒板に書き、品詞を明確にしつつ、例文2、3個を取り上げ、素早く例文を板書し学生に説明する。文法の説明順：①文法構造を書く、②例文を挙げる、③文を完成させる練習、④学生に文を作らせる、⑤作った文を評価し、間違いを訂正する。非常に明晰な説明と教・学連動の練習方法である。文を完成させる練習も頻繁に行われ、間違い易い言い方に対する注意や訂正、単語の意味の微妙な違いなどの説明、豊富な語彙を学生に与えていた。

直接法での文法説明は適切で解り易い。教員には情熱が溢れ、学生も非常に真剣である。教員の指導に従い、積極的に考え、発言していたのが印象的であった。

6.2.2 担当教員：孔祥霞先生、会話授業、学生数：20数名（世界各国からの留学生）

このクラスでは、学生の強い学習意欲を背景に、教員は前日の授業のスキットの内容に関して質問し、学生全員に答えさせ、共に考え、共に答えを出していく中で、各学生に自分はどれくらい勉強し、理解できたのかを判断する機会を与えていた。集中して授業を受けられ、学び合い、刺激し合い、相乗効果を活かすことができるようにしている。

また、インタビュー形式で自己紹介をするという学習者同士の会話練習も、学習者の自己表現意欲を向上させ、学生同士の学びあいと刺激し合う相乗効果を最大限に発揮できるよう工夫されていた。インタビューの間に、留学生に中国語によるコミュニケーションの楽しさを覚えさせ、異なる角度からの質問により、教室を楽しいコミュニケーションの場に変えていた。各学生の中国語レベル、発音が正確にできたかどうかなどの違いを意識させ、向上心を刺激する授業でもあった。このクラスは初級Ⅲとは言え、学生が使った単語のレベルが高く、語彙数も多い。学習意欲の高さを物語っているように見える。こうしたインタビュー形式の自己紹介は高い学習効果が得られ、今後本校の授業にも取り入れていきたいと考えている。

6.3 授業の特徴と今後の課題

今回浙江大学国際教育学院での授業参観・研究調査は良い経験とアイデアを与えてくれ、実りの多いものである。今後のAPU中国語教育に取り入れたいことを整理した。

第1に、教員の熱意と専門性である。今回の調査で交流したすべての教員の教育に対する熱心さや専門性の高さに感心した。殆どの授業では、パワーポイントなどを使わず、人対人の語学教育を実践している。

第2に、学生のモチベーションの高さである。留学生達は、「中国語が大好き」、「上手になりたい」、「仕事で使いたい」と言った。彼等は卒業単位や評価と関係なく、熱心に勉強し、可能な限りさまざまな場面や手段を活かし、中国語を身につけ、自ら中国語で発信している。私達の教学の中で、今後ともAPU生のモチベーションを向上させていきたいと考えている。

第3に、明確な目標設定の重要性である。短期間でHSK検定試験に合格できるように努力して欲しいという高い目標設定は、よりよい勉強効果に繋がっている。今回の研究調査後、本校の教学においても、中国語Ⅰ～ⅣにあったHSK合格による加点評価の実施を始めた。実施開始からまだ一学期しかたたないが、受講生は昨年度より大幅に増え、成果を期待しているところである。今後、一層の学生への参加呼びかけを行うと同時に授業でも試験対策のための練習を増やす必要があると考えている。また同学院の取り組みに学び、本学でも各教員の知恵を集め、重要文法項目や教学プラン、

評価基準などを話し合い、各レベルのより明確な目標設定を促して行きたい。

第4に、発音・ピンインを映像化している点である。発音を教える段階では、似たような発音や声調を比較し、異なる発音と声調に対しては異なる単語、異なる意味があることを数多くの単語練習で鮮明に取り上げ、毎日練習させていた。ピンインを映像化して記憶させていくためには、漢字の使用は入門段階では、できる限り遅らせるべきだと思う。今後、本学中国語Ⅰの発音授業では、発音を頭の中で映像化して、音声や意味に繋げていきたいと考えている。

第5に、APU生が受ける授業のレベルを調整する。浙江大学国際教育学院にはすでに2期に渡りAPU生を送ってきた。本校APUで中国語Ⅰ或いはⅡを勉強し、現地で次のレベル(Ⅱ或いはⅢ)を習得し、APUに戻り、中国語Ⅲ或いはⅣを履修できるようにしているが、実際は学習時間数の差が原因となり、APU生は現地クラスのレベルに追いついていない。今後、APUのイマージョンプログラム・システムとしては、1.5クラス或いは2.5クラスでの受講を認めるほうが学生にとって無理の少ない学習となり、より大きな学習効果が得られるだろう。5週間の期間中、キャッチアップ期間を与え、上達してからレベルⅡ或いはレベルⅢに上がり、半分の期間はより上のレベルで勉強できるシステムを作れたら、学生にとってもよいことだと考えている。

第6に、学生同士の学び合いは大変大切である。現在中国国内の中国語教授法では、教員主導型が多いように見られる。学生同士の交流や学生間の練習時間が非常に少なく、授業中に頭の中では中国語を一所懸命考えているが、口にして発表する機会が少ない。上記三大名門大学では、学生の発表を比較的に重視し、学生同士の練習も行っている。本学の授業は、教員の説明と学生同士の交流・練習・発表・質疑応答といった形を取り、学生同士の学び合いや相乗効果を大切にしている。この授業法は学生に大変歓迎されており、今後も続けていきたい。

今回の調査では授業参観と懇談を通して多くのことを学ぶことができた。今後、本学の授業では、中国語媒介による授業を試みたい。発音や文法構造の説明や例文作り、学生の発声練習を一層重視すべきである。今回の調査で得た経験やアイデアを活かしたいと考えている。

7. 中国の四大名門大学における外国人向け中国語教育の特徴と本研究調査の成果

上記の三大学での研究調査、東北財経大学APU中国語イマージョン・プログラムの実施を通して、中国の四大学の外国人向け中国語教育の特徴を下記のように整理できる。

第1は、媒介言語を使用せず、中国語のみの「直接法」を導入していることである。授業では教員は中国語を使用し、媒介言語の使用頻度が非常に低い。入門や初級の授業でもほとんど中国語で説明している。しかも初級クラスでも普通のスピードで授業を行っている。第2に、授業では教員はパワーポイントや映像を使用せずに、従来の「人対人」の語学教育の方式を重視している。これは学習者のコミュニケーション能力を高めるには非常に効果があると考えられる。第3に、教員は中国語の文法を系統的に教え、動詞や文型を中心に、学生が分かるように中国語で説明している。学生の理解を深めるために、多くの例文を出すとともに、学生にも短文をつくらせ、学生同士で練習する時間を意識的に設けている。第4に、復旦大学国際文化交流学院では、初級から上級までの学習者向けシリーズ教材の開発に力を入れている。第5に、上記の大学では学習者のレベルに合わせて、細かくクラスの設定を行っている。またHSK検定試験を重視している。第6に、学生のモチベーションが高い。学生は卒業単位や評価と関係なく、意欲的に勉強し、なるべく中国語で表現するようにしている。

上記三大学での研究調査、東北財経大学APU中国語イマージョン・プログラムの実施とその研究報告を通して、次の成果や意義があると考えられる。

第1に、中国を代表する重点大学の外国人向け中国語教育の実態、教育の特徴を学ぶとともに、中国語教育を担当している教員との交流ができた。第2に、浙江大学、東北財経大学でのAPUの中国語イマージョン・プログラムの充実・改善に向け大変参考になった。とくにイマージョン・プログラムの事前・事後学習の指導、現地での実施に対する改善の方法が明らかになるため、今後、このプログラムを実施する際、より魅力的で効果的なプログラムの創造が可能になる。第3に、四大学の外国人向け中国語教育の経験はAPUでの中国語教育の改善、とりわけ正課の授業の到達目標設定や活性化に重要な示唆を与えてくれる。第4に、このような研究調査は、イマージョン・プログラムの担当者だけでな

く、中国語教員の教育能力を向上させることにつながる。また APU の外国語教育全体にもよい影響を与えられ
る。

付記：本報告書の執筆者は本研究プロジェクトのメンバーである。曹瑞林は第1節、第7節、全体の編集、李秀麗は第
2節、王振宇は第3節、王蕊は第4節、呉青姫は第5節、張文青は第6節を執筆した。

このプロジェクトは、APU 言語教育センターからの支援、上記の中国 4 大名門大学からの多大な協力を得て実施す
ることができた。中国語教員一同、心より感謝申し上げたい。